NEW UNION OF ARCHITECTES AND ENGINEERS

NO. 279(1970 年創立)

新建みやぎ

やっぺぁ

新建築家技術者集団 宮城支部-Web

URL；宮城支部 | 新建築家技術者集団－新建web－(nu-ae.com)

2024 年（令和６年）４月発行

写真イ
『東日本大震災 100 の教訓復興検証編』
出版記念研究交流集会 から

写真ロ 同左

写真ハ 石巻市北上町熊谷産業

写真ニ 石巻市十三浜の日の出 佐々木文彦提供

★新建築家技術者集団 宮城支部からのお知らせ

- ✔ 能登半島地震の被災地支援活動のための募金を行いました。
- ✔ 住みよい復興公営住宅を考える住民の会 第４回総会・交流会 2024 年５月 25 日（土）戦災復興記念館
- ✔ 新建築家技術者集団宮城支部 例会 2024 年6月 21 日（金）18：30

★No.279 号 目 次

	頁
□ 新建宮城支部 石巻市・東松島市・女川町の被災地復興視察記録（その2）	2
□ 【まち・建築人／口伝3①】 一級建築士 小椋正博さん	4
□ 活動報告 佐々木文彦さん	5
□ 事務局だより	6
編集後記	

宮城支部連絡先 ☎(022)224―2137 仙台市青葉区上杉２－２－47 東北共栄建設株式会社/土山

★★★　新建宮城企画　★★★
石巻市・東松島市・女川町の被災地復興視察記録（その２）

●多士済々。楽しくも有意義なひと時

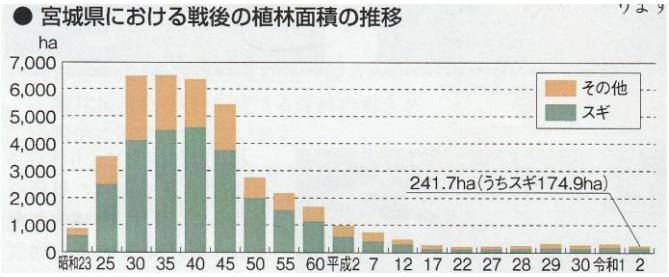
新建宮城支部の定宿と言っても良い追分温泉にての研修のひと時。総勢 11 名（確認）の参加。最初に参加者の自己紹介と西條さんからの新建の紹介。地元のお一人、佐藤清吾さんは、漁師で合併前の十三浜漁協組合長。津波で奥様とお孫さんをなくした。若い頃から原発反対運動にも参加、そのリーダー格のお一人で、理論家でもある。早くから原発事故を見越していた。3.11 の直前には石巻市総合計画策定委員もされており、その中で石巻市長に女川原発の避難計画の見直しを迫り、市長は「専門的な回答は即答できない」ということであったが、2010 年の御用納め 2 日前の日、市長からは「日本では原発事故は絶対に起きない。避難計画の見直しは必要ない」との回答、その 2 ヶ月半後に福島原発事故！（今年 9 月女川原発再稼働「決定」）

鈴木学さんは震災直後、相川地区避難所の自治会長として、家族の生死も確認する間もなく、避難所の運営に尽力。民生委員の地域の活動を中心に頑張っているとのこと。他、今日の講師である宮城県森林組合及び石巻森林組合会長の大内伸之さんなど地域のリーダーの方々に集まっていただいた。

大内伸之さんからは宮城県の森林・木材事情についてのお話を伺った。一時はウッドショックと言われる外材輸入がストップし、国内需要が一気に高まり、木材単価も高騰した。県土の 6 割が森林で、うちその 7 割が民有林である。森林資源の半分が人工林。

意外と知られていないのが、日本は緑豊かな国であることです。面積及び森林率は 2,500ha、66.3%でスエーデンも同様です。アメリカの森林率は 33.9%。最近では環境林としての整備も行われるようになってきました。

図1



宮城県の植林面積は増えていません（図１）。九州なんかは木を切ったら、その後に木を植えていますが、こちらは植えていません。山がお荷物という考えがあります。管理が大変なので組合で持ってくれということになっています。

日本では太い木材はいらないということになっています。中国では直径 60 ㎝でも売れるので輸出しています。最近では素人でも植樹が出来るようになっています。国は低花粉の木に植え替えるという動きもあります。しかし、下刈は相変わらず大変です。管理は当然ですがロットが大きい程良いです。ただケヤキは使うケースが少なくなり、値段が下がっています。

宮城県の山元立木価格は低下していますが、伐出賃金は上昇しています（図２）。東日本大震災による津波被災した県内の海岸防災林・民有林約 750ha は全て復旧が完了しました。国産材・外材別需要量と用途別素材生産量の推移についても紹介されました（図３、図４）。この後、気持ちの良い森の香りの正体であるフィトンチッドの働きなどについてのお話がありました。

図2　宮城県の立木原木価格と伐出賃金

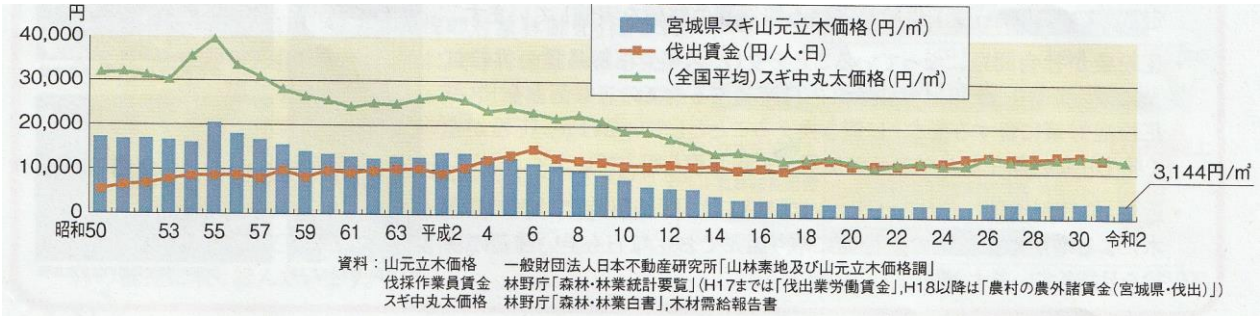


図3 宮城県木材需要量と外材率

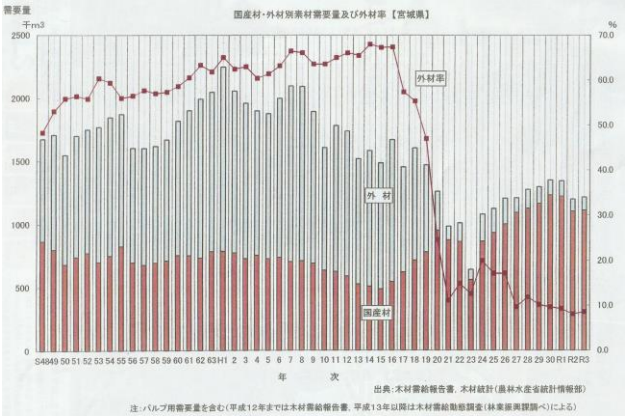
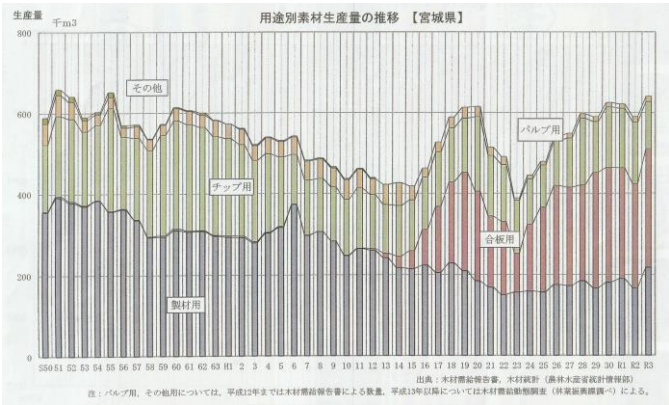


図4 同用途別素材生産量の推移



●追分旅館と森林管理

また興味ある話ですが、追分旅館を含む森林は180ha あり、地区の組合で管理しているが、固定資産の支払と組合員への配当が大変で、追分旅館の借地代もその一部に充てている。最近は水源保安林なので無税です。

追分温泉は、1948 年横山宗雄氏（福島県新地村生）により開湯。氏は戦後まもなく大峯金山に縁が有り居つきました。閉山後、三陸沿岸に温泉宿少なかった当時、金山の鉱洞より湧き出る鉱水（湧き水）を沸かし、ランプの湯治湯として地域を対象に開業し、現在に至っています。天然温泉ではありません。1997 年には全国的にも珍しい北限の榧木（かやのき樹齢約 500 年）で浴槽をつくりました（追分温泉の由来より。開湯時　右写真）。

●熊谷産業(茅葺材加工･施工)工場視察(表紙写真ハ　本社の茅葺とスレートの壁)

HP より:「国宝重要文化財保存修理工事　茅葺屋根工事、天然スレート葺屋根工事一式」「地元のかけがえのない財産・北上川のヨシを利用して、もっと茅葺きの仕事をしたい。そんな願いから、1993（平成 5）年、有限会社熊谷産業が設立されました。法人化によって、しだいに職人の道を志す若者たちが、門を叩くようになりました、地元だけでなく全国各地から貴重な人材が集まりました。ヨシ刈りの現場でも機械化を進めています。デンマーク製の大型刈り取り機械が導入され、より効率良くヨシ刈りができるようになりました。」

●女川町から牡鹿半島、石巻市門脇地区を一周

すっかり「観光地」に生まれ変わった女川町。デザインされた街ではあるが、果たして持続するのであろうか。水産業のみ（2020 年林家数 3 戸）では、時の流れから観光開発を選択するしかなかったのであろう。ここから女川町原発を見学して帰るという観光客はどのぐらいいるのであろうか。視察の下見で初めて女川町原発を目にしたが、何度見てもそのスケールには圧倒される。冒頭、追分温泉での十三浜の漁師・佐藤清吾さんの話と重なる。

牡鹿半島の津波被災地は、毎回行く度に寂しさを増している。高台移転は、まさに小規模、分散化、孤立化の問題が時を経るほどに明らかになり、間違いなく今次の復興が問われ続けることになるだろう。鮎川地区の復興についても女川町同様、観光開発である。被災前、仕事をやめたらスケッチをしながら海辺の町を訪ね歩こうと考えていた者（私）にとっては忸怩たる思いが募るのみである。

（2023.12.23 阿部重憲記）

【まち・建築人／口伝３①】

一級建築士　小椋正博さん（元三菱地所　勤務/新建宮城支部　73 歳）

われわれの時代と今、これからを考える

指物大工・祖父の影響があったかも

生まれは、福島県原ノ町。そこで祖父は指物大工をやっていた。茶ぶ台や机・椅子、茶箪笥、タンスなどなんでも作り、子どもの頃には木馬や刀も（写真 1, 2）。親父が国鉄勤めで転勤も多く、引っ越しのたびに祖父の作った家具を処分していた。今考えると『もったいなかったなあ』って思います。

夏休みには生家に預けられ、祖父の作業場で、玄能などを預けられ遊んでいた。祖父は仕事がない時に棺を作っていました。建築への道を選んだのは、その姿の影響があるかも知れません。

写真１　祖父の作った茶ぶ台

金の卵の時代。就職先は大手ゼネコン５社に集中

受験戦争をくぐりぬけ、産業界の即戦力と言われていた宮城高専の建築科に入りましたが、とにかく４人兄弟の長男なので、金のかからない学校が選択肢の一つ。授業料も免除になり、親孝行したと思います。高度経済成長にも陰りが差し始めたけど、超高層の霞が関ビルの映画も流され、その頃の就職は、金の卵で、大手建設業５社に集中し、後は役所や設計事務所でしたね。それで４年の終わりごろには就職先が決まってた。なので、その下の規模のゼネコンからは、文句が出されていました。

４年の秋頃から就職先の会社の面接が始まるわけ。青田刈りだよね。中には、あちこちの会社に願書を出し、二週間たっても学校に戻らず、みんなの心配をよそに東京見物をしてきたなんていう”知能犯“もいてさ。そんなこともあったので、一社当たり一人ということになり、ジャンケンで決めた。私は鹿島建設を希望したけどジャンケンに負けた。

写真２　祖父の作った木馬で得意顔のご本人

それでどうしようということになったけど、当時は三菱地所の名前さえ知らなかった。４年の夏休みに実地研修で、あるゼネコンの弘前市の現場に行った。そこでは、貸布団代や朝昼晩の飯代を引かれると、バイト代は残りわずか。お盆休みには酒を飲みながらの夜通しの見廻り。鉄筋屋は、型枠大工が来ないので、開口部も含めて鉄筋を組んでしまい、その後始末で 13 ミリの鉄筋を切らされた。銭湯で鏡を見たら胸には痣（あざ）が…、という体験もあったので、仮に大手ゼネコンに入ったとしても、希望する設計がやれるかどうかわからないし。

三菱地所の事を調べたら、丸の内の大家だって知り、これで現場行きはないなと思い、面接試験を受けた。先輩はいなかったので、ダメもとだったけど採用された。同期には大手企業等の役員の子弟も。田舎っぺは俺だけかって。入社当時の建築部門は、丸の内地区などの自社物件専門部門、三菱系企業例えばキリンビール等に関する部門などに分かれ、私は一般企業の物件を担当する部門に配属された。

もう東京には住めないなぁ

先日、連続爆破事件の犯人が横浜の病院で見つかり、亡くなりましたけど、1974 年 8 月の三菱重工本社を始め大企業やゼネコンを狙った連続企業爆破事件が発生しました。それで東京にいたんではおちおち電車にも乗れないって。電車の棚の荷物が爆破するんじゃないかと思い、車両を乗り変えたりする時代でした。親も心配するし、長

男なので地元に帰らなければと 1975 年 3 月に退職願を出した。

そしたら、高専の先生が上京したので上野駅で会った。「もうちょっと考えた方がいい。お前が 3 年ちょっとで止めたら次のやつが入れない」、「夫々の人生だし、やっぱり止めます」「好きにしろ…」って。それから毎日、部長と副部長とに交互に昼食に誘われ「もう少し考えたらいいんじゃないか」って。何度も繰り返されると、もう食事も喉を通らない。

仙台での職場も決め、その出社期限の 4 月を過ぎても退職が認められず困惑していたとき、建築担当の役員に呼ばれた。いよいよ「辞められる」と思い役員室に入ると、「小椋君、建築士の資格持っているのかね」と。「まだ入社 3 年で、高専卒（の受験資格）は 4 年の実務経験が必要です」「来年になると資格あるんだね。そしたら仙台支店に行ってくれ」って。

驚いて、親父と相談して仙台での就職を断りました。部長は私の退職願を人事部に出さないでおいたんだね。彼は、著名な建築家の子息で、芸術家肌でした。副部長は後に副社長になった方でした。結局、東京の本社にいたのは 3 年 2 ヶ月でした。（続）

注） 連続企業爆破事件とは・・・当時、暴力革命集団が大企業（商社、ゼネコンなど）をターゲットにした爆弾テロが横行。事件の一つに 1974 年 8 月 30 日、丸の内の三菱重工本社が爆破される事件が起きた。当時、私の部署は丸ビル 8 階にあり、爆破の衝撃で中通りのビル群の全ての窓ガラスが破壊落下し、死者と多数の怪我人がでた事件。

（取材；2024 年 3 月 7 日：荒木、阿部）

活・動・報・告　佐々木文彦さん/会員・宮城支部

◆ 1 月 20 日(土)、21 日(日)の 2 日間、仙台の夢メッセみやぎにて開催された宮城・仙台新築リフォームフェアに杜の家づくりネットワークとして出展しました。当会のブースでは会員各社の商品・作品の展示や建築相談、物販、障子張り体験、カンナ掛け体験などのほか、両日 13：00 より模擬上棟式&お福分けとしての餅まきの実演をしました。21(日)は模擬上棟式に合わせ伊達木遣り会の皆様による木遣り謳いの披露もあり盛り上がりました。20(土)で 3309 人、21(日)で 5090 人、合計で 8399 人の来場者とのことでした。

＊写真とかの様子は杜の家づくりネットワークの HP か、ササキ設計の HP のブログ、に詳しく掲載してます。
http://www.morinoie.net/index.php?action=pages_view_main&active_action
https://sasakisekkei.co.jp/blog

◆ 2 月 4 日（日）私の地元北上町十三浜小指地区(相川、大室等も同日)で、年に一度の恒例の春祈祷と呼ばれる春祭りがありました。小指地区は震災後、東海大学からの支援で建てて頂いた地区集会施設の「小指観音堂」に朝集まり神事をするだけでした。しかし、コロナ禍後と同様各家々を廻る獅子舞等は中止でした。

一方、大室・小室地区はやると言うのを聞いたので、孫達が楽しみに泊まりに来ていたので同級生のいる大室地区に連れて行き、楽しく参加することが出来ました。

春祈祷: 神事の後各家々を和太鼓や笛の囃子で舞う獅子舞いがその家の幸せを招き、厄祓いをする伝統の行事です。この地区から巣立って仙台等の都会で暮らしている兄弟、叔父叔母等がに子供連れで楽しみに里帰りしてくるからこの日ばかりは若者たちの数が多い。地区とって大事なかけがえのないイベントです。

■事務局から

去る２月15日（木）支部会議が行われました。出席者は８名（欠席連絡者含む）で、主に能登半島地震とその対応、及び支部後援行事についての感想が寄せられましたので紹介します。

① 能登半島地震について

被災状況からは、耐震（対策）に問題がありそうだ。柱が、こちら（東北地方）よりも細い。京都の町屋の影響もあるのか。避難所の風景がこれまでと全く変わっていない、段ボールベッドも普及しているはずであるが、対応がなっていない。プッシュ型支援も出来ないという（怒）。救急ヘリコプターの発動もこちらと比べると少ない。

「避難だ」とか「入るな」とか対応がトップダウンで動いているのではないか（東日本大震災時の混乱をふまえてか）。東日本大震災の被災者、経験者として声を出していこう。

② ＜支部後援行事＞『東日本大震災 100 の教訓 復興検証編』出版記念研究交流集会：検証なき復興フェードアウトに抗して（表紙写真イ、ロ）

２月 11 日、12 日の二日間開催。オンラインを含め約 100 名の参加。鈴木浩、室崎益輝、塩崎賢明、津久井進先生という、今やときめく豪華メンバーの参加で非常に中身の濃い集会。二日間とも NHK が朝のニュースで大きく取り上げ、期間中カメラを回していた。

二日間参加した。アンケートも書いた。深松組社長の話にあった（今後）がれき処理をやる人がいなくなるという問題提起は重い。建設業の役割については、社会のあり方に迫っている。いろんな人と一緒に（考えや仕事の違いを超えて）やるのが復興である。企業として利益確保は当然であるが、重要なのは事業者としての自己管理がポイント。そこで信頼を得る事ことが重要との指摘であった（3 ヵ月仕事してもお金が出ないという事態で意識が変わった）。

ボランティアとは「助ける」ことではなく、「人と向き合う」であるという点が理解できた。「寄り添う」とは代弁者であるという点も分かった。災害ケースマネージメントの主体や、そのために、ありのままデータ化するという難しさなども理解できた。

全体として中味が濃かったと思うけど、まだ入口である。ハードの話が多かったが、医療の面なども含めて総合的な取組が重要である（忘れないように）。とにかくフェードアウトしないこと。チリ地震の経験者としても震災を忘れてはならない。日常的にも「いのち」、「生活」、「文化」を語り、深めていく必要がある。

専門的な用語が多く、わかりやすい内容にする必要がある（特に二日目、第二セッション）。

以　上

編集後記：

口伝（Ｐ４）の写真は、ご本人が、実家まで出向いて探し、ご提供頂きました。気付きましたか？その小さな足が動いているのを。「ほら、動かないで」という撮影者の声も聞こえます。

ウクライナもパレスチナも、犠牲者の多くは子どもと女性。「止め！」の声は届かない…。「建築は政治だ」と繰り返していたのは巨匠オスカー・ニーマイヤーである。

✿復興公営住宅の春です。入口と大通りに面した花壇。道行く人の目を楽しませています。（写真：仙台市あすと長町）